

私は30年間勤務した民間教育機関を早期退職してから、これまで8年間、社会福祉事務所の就労支援員として仕事をしてきた。

支援している対象の方はさまざまな生きづらさを抱えている方が多い。人間一人一人がその人の人生という物語を生きているとするならば、かなり壮絶な物語を生きてきた方

ナビゲーター

も少なくない。私達支援員はその方の生活歴やそれまでの支援記録を読み、またその方の語られることを聴いて、その物語を知ることになる。日々のリアルなしかもそれぞれにドラマチックな人生の物語を聴くというのは、ある意味で贅沢で豊かな仕事だと私は思う。しかも、支援の中で、その方の人生の

産業カウンセラーの現場から

相談者の思いに共感して
相談者の思いに伴走する

16

人生の転機に立ち会う

変わる瞬間、まさに転機に立ち会うことが度々ある。紙面の都合上一つだけご紹介したい。守秘義務があるので、これまでのいくつかの経験をフィクションとして再構成した。

Aさん。40代男性。旋盤工として働いていたが、30代前半にバイクの自損事故で右腕を失い、障害年金と妻の収入で生活。自らは家事と娘の子育てを担当。しかし次第にパチンコに依存するようになりついには離婚。娘は妻が引き取る。Aさんは単身で生活保護に。就労支援する中で、障害者就労の軽作業の仕事が見つかり、採用面接のため、当該事

社会福祉事務所の就労支援員

業所で私と待ち合わせ。ところがAさんが現れない。私は登録されていた携帯番号に電話してみた。「はい…」と出たのは若い女性の声。「Aさんの携帯ではないでしょうか？」「…それは、…父です」。私は経験上とっ

さに察した。Aさんは料金滞納等で携帯が無く娘の携帯番号を登録したのだろう。しかし娘さんに事情を話すわけにはいかない。「社会福祉事務所の渡辺と申します。手違いで電話してしまいました。失礼しました」とおわびして電話を終えた。高校生のこの娘さんの行動が展開を生んだ。電話があったことを伝えるに、離れて住む父のサポートに

行ってくれたのだ。Aさんにとって娘は心の支えだ。不自由な体で子育てをしてきた。離婚後も交流は続けてきた。自立して娘の進学費用を助けるのがAさんの目標であった。Aさんから事情を聞いた娘さんが父を励ました。気後れしていたAさんは勇気をとり戻し、間もなく仕事に就くことができた。今では現場のリーダーとして活躍している。自立をし、少しずつだが娘の学費も援助できているそうだ。

私がこの仕事を続けてきたのは、こんな人生の転機に立ち会う感動があるからだと言つてよい。

【日本産業カウンセラー協会中部支部講師
社会福祉事務所就労支援員、産業カウンセラー・公認心理師・2級キャリアコンサルタント
ング技能士 渡辺英明】

(火曜日に掲載)

